■R01.08.08　市長定例記者会見内容

日時　令和元年８月８日（木）午前11時～正午

場所　庁議室

出席　市長、副市長、総務部長、危機管理監、地域創生部交流推進調整監、市長公室長
酒田記者クラブ　9 社（山形新聞、荘内日報、朝日新聞、毎日新聞、河北新報、読売新聞、ＮＨＫ、ＹＢＣ、ＴＵＹ）

■市長発表内容

【第２５回酒田市土門拳文化賞受賞者決定のお知らせについて】

去る６月２８日（金）に、酒田市において選考委員会を開催し、資料のとおり第２５回酒田市土門拳文化賞１作品、土門拳文化賞奨励賞３作品が選考され、決定したのでお知らせする。

「酒田市土門拳文化賞」は、本市出身の世界的な写真家・土門拳氏の文化芸術への功績を記念するとともに、写真文化、写真芸術の振興を目的に創設されたもので、土門拳記念館開館１０周年を機に平成６年度から始まり、今年で第２５回目を迎えた。

今回は、全国３５都道府県のアマチュア写真家、１３７人の皆さんから、１４３テーマの作品の応募があった。山形県の方の応募は５人で、そのうち酒田市からの応募は３人。（昨年度は山形県１０人、酒田市６人）テーマ数は例年並みだが、この１０年ほどの間に、全応募作品の総枚数が約３，９００～４，０００枚と増加の傾向にあり、なかでも少子高齢化に伴う命の尊厳の問題、大都市の過密の一方で進む地方の過疎、限界集落の問題などを訴える精神性の高い作品が多いことも特色のひとつ。

なお、今回の第２５回土門拳文化賞から、前回まで毎年３月に行ってきた授賞式を９月に実施することとした。これは全国的に観光が盛んな秋に、本市の文化芸術の象徴的施設といえる土門拳記念館で授賞式を実施することにより、酒田市民だけでなく、この季節に本市を訪れる市外の皆様からも同賞を広く知っていただき、作品を鑑賞していただきたいということ、また、歴代の土門拳文化賞受賞者の方々も今回の授賞式の期間にあわせて約４０名が酒田を訪れ、歴代受賞者近作展の開催するほか、市内の写真愛好家を対象とした写真講評会も開催することから、文化賞のより一層の盛り上がりと酒田のファンを増やし、交流人口の更なる拡大を期待するもの。

●酒田市土門拳文化賞受賞作品について

酒田市土門拳文化賞受賞作品は、

「糸遊（いとゆう）　～　ＧＯＳＳＡＭＥＲ 」（モノクロ　30 枚組）

上瀧（こうたき）　由布子（ゆうこ）　氏（52 歳）千葉県松戸市在住の主婦の方の作品。

作品コメント等詳しくは、資料参照。

【質疑応答】

記者／受賞者の生年月日は？
担当／確認して投げ込みする。

■懇談・フリー質問
【市長選挙】
記者／政党、団体への支援要請をする、また、したところは。
市長／自民党、公明党、立憲民主党、国民民主党に要請している。団体は市内の各企業団体に依頼を出している。前回推薦いただいた団体、今回新たに支援をお願いしたい企業ある。推薦状はまだ集約しきれていないが支援してもらえることをありがたく思っている。
記者／政策だけでないプロフィール会見を、盆明けの週 19、20 日あたりに 1 時間ほど事務所でお願いしたい。
市長／日程を確認して、幹事社に連絡する。
記者／市長選は一騎打ちの公算が大きくなっている。意気込み・コメントを。
市長／巷ではいろいろ話はあったが、過去に酒田の市長選で無投票になったことはないし、今回も無投票にはならないと思っていた。4 年間の市政に市民が評価する唯一の機会。選挙の場でしっかり成果をアピールするとともに、これからやりたいことも示して、市民のみなさんの選択を仰ぎたい。選挙になったからからどうということではなく粛々と選挙戦に臨んでいきたい。
記者／元市長である対立候補に対してはどう考えている。
市長／市長、国会議員の実績がある方で、私自身かつて仕えた方でもあり、まちづくりの進め方を学んだ方。そういった方と競うということで、しっかりまちのすすめかたについて議論を進めさせて、市民の皆さんから選んでいただきたい。過去に実績もある方であり、市民から評価はしっかりしてもらえるのではないかという期待感も持っている。
記者／対立候補は現在の市政へ反対姿勢だが。
市長／基本的に指摘は全く当たっていないと思っている。先日記事に掲載された記事を攻撃材料にしているところがあるが、あれは明らかな誤報だと思っているので、それに対して誤報自体を議論の遡上にあげる必要はないと思っている。
記者／そうはいっても、対立候補となる先方が行動に移してきている以上、資料をしっかり出して反論するつもりはあるのか。
市長／それはもちろんある。1 回出てしまうと影響力が大きいので、それは違うと説明していかなければならない。相手方の立候補を予定している方やそれを取り巻く方が内部にいた方が多いので、十分知っている話なのにも関わらず、あえてそれを争点にするのはどうかな、違うのではないかなという思いがある。ただ一般の方はそこまでわからないと思うので、誤解している人が多いとすれば、誤解を解くような説明の場を持って、言うべきことは言う必要があると思っている。

記者／選挙戦で一番訴えていきたいことは？
市長／産業の振興と交流拡大をすることでこの地域がもっと豊かになるということを具体的な施策を示しながら継続的に訴えていきたい。豊かになるというのは所得があがるというだけでなく、精神面、教育・文化や福祉面で安全に暮らせるというのも豊かのひとつだと思う。それも成果をアピールしていきたい。人口減少に抑制がかからないなかで、勤労世代にしっかり支援の手を差し伸べる。そういう意味では幼児教育・保育の無償化など市の手厚いケアなどを示してアピールしていきたい。
記者／仕えたこともある対立候補との仕事などで印象に残っていることは。
市長／私が公益大をつくるため県庁に派遣されているときに、市長になって真っ先に山形に飛んできてくれた。期間が定まっているハードな仕事をこなしているときに、なったばかりの市長が激励に来てくれたことに感動した。また、合併後に合併の優遇措置がある期間に市の財政を立て直さなければならないという時期に一緒にやってきたことで、一緒に酒田市を盛り立ててきたという意識があるので、そういう面ではいい思い出しかない。本間前市長が亡くなった際に、第一報を阿部さんに入れた。その時にがっくりとショックを受けていたこと、これが直近では一番鮮明に覚えている。
記者／対立候補はパンフレットで事業の優先順位に疑義があるというようなことも主張しているが
市長／あれは検討材料上での数字なので、あれで予算を固めているわけでもないし、それをああいった書き方をされてしまったので、あれは記事としてはいかがなものかという批判もあったのではないかと思うが。
記者／全くない。
市長／それならば見解の相違だ。ああいう風に書かれたのはある意味心外。単なる積み上げだとそうなるから、そうならないようにこれから予算の編成作業に入るというものをあたかも財政破綻みたいな書かれ方をされるのは心外であって、それはマスコミの皆さんももう少し勉強する必要があるということ。実際他の社は書いていないし、早とちりではなかったのかなと思う。
記者／記者会見はホームページにも公開されるものなので私も指摘するが、市長は公の場で、実際に 38 億円が予算編成足りなくなりそうだと言った。それを言ったという風に記事を書いたわけで。また、議会の場でも同じようなこと言った。それを書くことについてなんら事実に誤りがあるわけでもなく、事実関係を書いただけなので、誤報というのは市長の発言としていかがなものかと私は逆に思う。
市長／それは見解の相違だ。私は試算上の数字を捉えてああいう発言をしたということで議会でも答弁をしてるだけ。あくまでも試算上の話で、そこから作業して精緻なものを積み上げていくという経過の話。私としては議会との間でも、市民との間でも、この記者会見もそうだが、決まったことだけをお知らせするような議論のやり方は本意ではない。経過のこともしっかり伝え、意見も聞いて、政策や政治判断積み上げていくこと

が私の政治姿勢。それをとやかく言われるのは見解の相違でしかない。議会でも発言の本意は何かという聞かれ方をすれば、あの時点でいうと令和２年度の予算編成をするにあたっては、いろんな情報のやり取りをしていて、試算上だが 38 億円足りないような状況になるので、ここから優先順位が高いものを前に出して、低いものをあとに送る、そういった形で予算をしっかり編成していくということを言ったつもり。それを 38 億円足りなくなるような財政運営だという風なことで書かれるのは、そういう風な宣伝で使われるのは私としては本意ではないということ。ある社がそういう記事を書いたかどうかということについては、見解としてはそういうつもりで書いたのではないというかもしれないが、今回財政破綻みたいな使われ方をしているので、どうかなと思っているだけ。報道の自由があるので、私がエー（A）といったことに対してエーダッシュ（A’）と報道したとしてもそれをとやかく言う話ではないのでいいと思う。ただ、私がそういう意味で言っているのではないということは改めてわかってほしい。
記者／市長の意をくんだように記事を書いてほしいということか。
市長／そんなことはない。報道は自由なので。先ほど言ったようにエーをエーダッシュと書こうが、それは皆さんの受けとめ方次第なので、私はとやかく言わない。だが、書かれたことについて自分の意図することと違うのであれば、それはちょっと違うと言ってもいいのでしょう。
記者／違う風に書いたのであれば誤報と言う資格があると思うが、私は市長が言ったことを一言一句文字通り起こして書いている。マスコミ対する忖度をしてほしいという思いはあるんだろうが、また胸襟を開いて喋っているということなのかもしれないが、ホームページにも公開される場で誤報だと断定するのは受けいれがたい。もし誤報だというのであれば正式なルートを通して抗議してほしい。
市長／あの後も記者会見の時に記事を書いた社が謝った。そういうこともあって、ニュアンスと違う表現のされかたをしているのかなというところがある。選挙の中で 38 億円不足する、財政破綻だということの使われ方は誤報だと言っているだけで、そのように書いているとは言わない。ただ相手方がそのように理解するとすると、それはちょっと誤った解釈の仕方ではないかなという思いをしているだけ。別に特定の社を責めているわけではない。ただ、１社しかああいう書き方をしなかったので。
記者／私としても対立候補と通じてあの記事を書いたわけではない。先方が記事をどういう意図で使うかは預り知らない。
市長／それはそうだろう。だから別に特定の新聞社や報道機関を非難しているのではなくて、それを引用しているほうが悪いのかどうかはわからないが、そういう誤解があるんじゃないかという意味で言ってるだけ。そんなに気にしないで。
記者／ちょっと気になる。私が記事を書いたあの時は市長としての発言が軽かったのではないかと思った。やはりそう思われてしまう部分はある。
市長／たしかにそういう風に言う人もいるかもしれない。私はなるべくその時点時点で

の市役所内部での議論などは情報として出すようにしている。今市役所はなにをしているのか、どういった動きなのかということを極力市民にオープンにしたいというのが私の姿勢。決まったことだけ伝えるという在り方の酒田市政にはしたくなかった。リスクとしては誤解を与えるような発言が出ることもあるかもしれないが、もうちょっとフランクに話ができればと思っている。記者会見の場でも決まったことだけを伝えるのであれば、紙だけ出せばいい。今もやり取りしているが、こういう場が大切だと思っている。市長として発言があまりにも軽率だというのであれば、それはそれとしてしっかり受け止める。だからと言って決まったことしか話さないような市民や報道機関との関係にしようというつもりはない。これは私の政治姿勢の問題。皆さんも書くときはそういう性格の市長だということを理解していただければありがたい。
記者／少し話がずれるかもしれないが、優先順位という話を対立候補がしているという話があった。駅前、中町、日和山、山居倉庫中心に力を入れて再整備事業を進めている、また今後進める予定のものがあると思うが、市長の中でそれぞれどのような位置づけか教えてほしい。
市長／駅前は着手しているので粛々と進めていくしかない。過去２回頓挫もして、ずっと駅前なんとかならないかと言われ続けてきた。阿部前市長、本間前市長と同じ課題でここまできたなかでなんとしてもやりとげたい。クルーズ船寄港、LCC 就航などで市街地に外国の方が来るようになった。酒田の街が魅力ある街であるためには、日和山界隈や山居倉庫界隈などの中心市街地や飯森山もそうだが魅力あるものにしなければならないと思ってこだわっている。ただし、財政的には非常に厳しい時代になっている。合併特例債もまもなく使える期間が終わり、交付税も縮減に入っている。平成 28 年度くらいまで基金は増やすという動向できた。優遇措置がなくなると財政的にさらに厳しさを増すとわかっていたので、まず貯めようと。今度交付税が減らされると資金がなくなってくる。基金を取り崩しながらやらなければならない課題については、ハードより福祉・教育・子育て支援などに単費をつぎ込んできたが、市民のためにそういったお金を使う必要があると思っているが一方で、税収を上げるためには、地元に金が落ちるまたは産業界が元気になるような仕掛けも積極的にやっていかなければいけないので、つかうべきところには投資という意味で使わなければならない。その中には山居倉庫周辺があり、市街地があり、日和山があり飯森山周辺もある。もっというとジオパークだとか松山地域の歴史のある街並みゾーンだとかいろんなものがあると思う。その中で、限られた財源の中でどこから着手するかということがこれからの大きな知恵の出しどころ。山居倉庫の史跡指定は作業が進んでいる。そこから先の商業高校の跡地をどうするかということについてはもっと議論が必要だと思っている。それはまだ具体的な形ができていないので、優先順位が高いかと言われると私の中ではまだニュートラル。小幡については一定程度保存してきた方の思いもあり、市民の声もなんとか再生してもらいたいというものがあったという意識から、ああいう動きをしている。これも動いているので

粛々とやるしかない。市街地に関してはお客さんを呼び込むため天気が悪い時でもさまざまなイベントができるように天蓋をかけたり噴水を出したり。今年みたいにものすごく暑いとあの噴水もよかったと思う。そういうことをやったので、優先順位からするとまず駅前を成功させなければならないというのが一番。それ以外は財政状況や計画の煮詰まりぐらいを見ながら、急ぐべきものは判断していくということになる。皆さんと協議しながら進めていきたい。
記者／基金が今年度末に少なくなるというのが対立候補の攻撃材料となっている。市長の考え方としては基金は積むべく時は積んで、崩すところは崩すという考えか。
市長／その通り。財政調整基金はどれくらいが適当か、基準はないのかという質問を私が財務部長の時に議会でされた際に、会津若松市を例に標準財政規模の 1 割と答弁した。その当時たぶん 21、2 億だったと思うが、合併の特例債など有利な算定替え、一本算定になる前だったので、そういう時に貯めていかなければならないということで 30 億を超えるところまでいって、今 20 数億だが、また 30 億までなるだろう。基金の額としては維持していると思う。ただ平成 28 年度以降 5 か年かけて交付税が減っていくなかで、税収を上げるためにやるべきところはやっていくため、基金を法律的に崩して市民サービスにお金は使わなければならない。たしかにこれからなかなか環境厳しいと思う。基金がなくなる前に税収でカバーする施策も打っていきたいと思う。両面作戦で頑張っていかなければならないという思い。

【小松屋の事業停止について】
記者／和洋菓子製造の小松屋が事業停止したが、率直にどのように受け止めたか。
市長／残念。呉竹最中がもう食べられないと思うとがっかりする。民間企業の経営の話で手の打ちようがなかったが、酒田の老舗のお菓子屋が廃業せざるを得なくなったということは残念極まりないという思いで受け止めた。私が市職員だった時は、仕事帰りに小松屋のお菓子を買うのが楽しみだった。名物が消えていくのは寂しい。エルミタージュ美術館（ロシア）にも小松屋に作ってもらった雛菓子を持って行った。あれもお菓子だけど芸術作品のようなもの。職人芸ともいえる技術を残したかった。これからどうしたらそういうものを残していけるか、まちづくりを考える上で考えていかなければならないのかなと思う。
記者／観光への影響は？
市長／あると思う。観光振興はこれから差別化を図ることが必要な条件だと思う。ああいうお菓子だとか、物産だとか伝統工芸などというものはそういったものに属するものだと思うので、そういったものがなくなるのは観光地としての魅力にはマイナスに作用する気がする。なんとかああいう老舗の店は存続してもらえると町にとってはありがたい話だという思いはある。
記者／小松屋の呉竹最中は酒田土産の定番だったと思うが、酒田のお土産も多様化して

いるということなのか？
市長／多様化しているし、新しいものも作っていかなければならない。古いものも残していかなければならない。大変難しいが、町の魅力を高めるためにはなりふり構わずいろんな仕掛けをしていかないとだめかなと。同じものをずっと持っていてもだめ。次から次へと変えていかなければならない時代。全国の市町村が競争の中で知恵を出し合って頑張っている。我々もそれに負けないようにいろんなところで支援したり、施策を打っていったりしなければならないと思う。そういうことをしていって人口減少の抑制につながればいいが、そんなに単純ではなく、なかなか難しい。いずれにしてもやりうる努力はこつこつ積み重ねるしかないという思いでいる。

以上